

日本人の靈魂觀
～団子はなぜ丸い～

荒 井 優

Masaru ARAI :
A View of the Soul in Japanese
～Why is Dango round?～

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第74号 抜刷

2017年1月

日本人の靈魂観 ～団子はなぜ丸い～

荒井 優¹

Masaru ARAI : A View of the Soul in Japanese ~ Why is Dango round? ~

日本の正月やお盆、祭りの日など、ハレの日に食べる食べものはなぜか丸いものが多い。神へ奉げる食べものが丸いのはなぜか。折口信夫の民俗学を通して、説明する。その背後には、日本人独自の靈魂観があり、日本人独自の神信仰と結びついた食事作法がある。

キーワード：折口信夫 郷愁体験 常世 浄土信仰 補陀落渡海 まれびと 祭り 石 依代

1. はじめに

幼い頃の私は、とても病弱だった。だから、幼い頃の私の記憶は、いつも部屋のなかで臥している情景しか残っていない。外に出たときの記憶といえば、正月の初詣や七五三のお宮参り、夏祭りの縁日といった記憶である。つまり、私の幼いころの記憶は、いずれも年中行事のある一コマの記憶なのだ。そして、そうした行事の折に、私の目に焼きついている光景は、団子や餅、餅花飾りなど、丸い形の食べものや飾りものである。成人してから、幼いときの記憶を振り返るとき、かならずそのときの光景が甦ってくる。そうして振り返るたびごとに、私の脳裏にある疑問が生まれた。お正月やお盆の日、お祭りの日やお祝いの日に出てくる食べものは、なぜか丸いものが多い。団子は丸い。おはぎも丸い。普段食べるおむすびは三角形なのに、ハレの日に食べる食べものはみな丸い。正月にお供えする鏡餅も丸い。なぜ、丸いのか？ それらが「丸い」ことに納得してしまうだけに、そこには何か理由があるはずだと思うのである。

私が宗教学を勉強するようになって、その傍らで

折口信夫の民俗学の本を手にしたとき、はじめてこの疑問を解く鍵がみつかった。そして、日本人の伝統行事にまつわる疑問も次々に氷解していった。そこで、「団子はなぜ丸いのか」ということを、折口民俗学を通して説明しようと思う。それは、折口民俗学が描く日本人の靈魂観と深く結びついている。そして、日本人が昔からもっている宗教的な心の性（さが）とも深く絡みあっている。あるいは、日本人自身が気づいていない、いわば「無意識的な信仰」と言ってもよいかもしれない。そこにあるのは、仏教とか神道とかといった、組織的宗派的な「宗教」ではなくて、それよりもっと根源的な文化的精神的な靈魂観（無意識的な靈魂信仰）が潜んでいる。それは、仏教やキリスト教が日本に入ってくる以前からあった、日本の原始的な靈魂観である。そして、それとともに、日本人の伝統行事の背後に、（薄ぼんやりとしてはいるが）宗教的な祖靈観、宗教的なあの世観が垣間見えてくる。正月も、お盆も、お彼岸も、流し雛も、すべての年中行事が、一貫した靈魂観にもとづいて営まれている。それは、死者を敬い、死者を恐れ、死者との関係を大切にすること、日本人の古来からの「祖靈信仰」として特徴づけることができると思う。

科学的唯物論がはびこる現代において、そうした宗教的な靈魂観を「迷信」として片づけてしまうこ

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

とは簡単である。しかし、それは西洋特有の近代合理主義の手法である。それによって、多くの貴重な文化的精神的な特性が見落とされ、失われてしまう。19世紀フランスの人類学者レヴィ・ブリュール (Lucien Lévy-Bruhl, 1857-1939) は『未開社会の思惟』(Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures, 1910) のなかで、未開人は前論理的であるといわれるが、未開人には未開人なりの(西洋の合理主義とは異なる)論理があるのだと述べて、これを「原始心性」(Mentalité primitive) と名づけている¹⁾。世界中に残っている各地域の伝統的な土着文化は、その地域特有の直観と論理にもとづいて形成されてきた。その意味において、すべての文化はローカルな性格をもっている。近代以降、先進地域とされる欧米の文化でさえもが、本質的にローカルなのである。

その意味において、日本の年中行事には、昔も今も変わらない日本人の原始心性がある。日本人の原始心性に裏打ちされた靈魂観とはどのようなものなのかを、ここで折口民俗学を通して辿っていこう。

2. 日本人の郷愁体験

明治45年(1912年)、大阪のある中学校の教員をしていた折口信夫は、当時の教え子二人をともなって志摩と熊野を徒歩旅行した。そのときの異郷体験を、折口は『國學院雑誌』に「妣が国へ・常世へ」と題した論文のなかで語っている。

「十年前、熊野に旅して、光充つ真昼の海に突き出た大王ヶ崎の尽端に立った時、遥かな波路の果に、わが魂のふるさとのあるような気がしてならなかった。これをはかない詩人氣どりの感傷と卑下する気には、今もつてなれない。これはこれ、かつては祖々の胸を煽り立てた懐郷心(のすたるじい)の、間歇遺伝(あたはずむ)として、現れたものではなからうか。すさのをのみことが、青山を枯山なすまで慕い歎き、いなしのみことが、波の穂を踏んで渡られた「妣が国」は、われわれの祖たちの恋慕した

魂のふる郷^{さと}であったであろう。』²⁾折口民俗学の出発点がここにある。

折口は志摩半島の先端、大王ヶ崎に立って、夕日の沈むはるかな西の海の彼方に、わが「魂のふるさと」があるような気がしてならなかったという。現代の私たちでも、海辺に立って、はるかな海の水平線に夕日が沈むのを見ると、何とも言えない不思議な郷愁(ノスタルジー)に襲われる。そのときの郷愁体験は折口ひとりのものではなく、決して詩人氣どりのセンチメンタルな感情ではなく、すべての日本人が共有する郷愁体験なのだと言っている。いや、それどころか、日本人に固有な、祖先から延々と引き継がれてきた原始的な感情であり、先祖から受け継いだ「間歇遺伝」(アタイズム)なのだと言っている。それは、ユング心理学がいう「集合的無意識」に由来する日本人特有の文化的無意識ということになるであろう。それは実証することはできないが、記紀神話や万葉集に精通した折口の鋭い民俗的直観であった。

3. 魂のふるさと～「常世」

はるか昔、日本人の祖先は、黒潮の流れに乗って、はるか西の海の彼方から、この日本列島にやってきた。それは歴史がはじまる前の、太古の時代のことである。『古事記』のなかで、スサノヲの命が父イザナギの命から海上を治めよと命じられたとき、彼は「妣が国」へ帰りたいと言って「青山を枯山なすまで」泣きじゃくったと記される。その「妣が国」とは先祖のふるさとのことである。先祖のふるさと、「妣が国」について、当初の子孫たちは代を継いで先祖から聞き知っていたであろう。しかし、やがて時が経って、「妣が国」の物語は忘れられ、望郷の念だけが「間歇遺伝」のように日本人の子孫の心に残った。ただ一つだけ、西の海の彼方へ沈む夕日が、日本人の心に不思議なノスタルジーを惹きおこす。

折口によれば、海の彼方にある祖国への郷愁はやがて「魂のふるさと」、「永遠の楽土」へと昇華した。

それは単なる外国ではない。海外の他国ではなく、海の彼方にある理想郷として観想された。自分たちが住んでいるこの世界とは異なる、別の次元の世界があると、古代の日本人は想像した。今日、私たちがファンタジー映画や妖怪物語のなかで空想する「異郷」「異界」という概念がこれにあたるであろう。いつも利用する鉄道駅のプラットホームが、ある時、異界への入り口になることがある。旅路の果てに行きついた見知らぬ人里が実は次元の異なる異郷や他界であったりする。この世を超えた不思議な世界は、憧れの対象でありながら、しかも近寄り難い畏怖の対象でもある。『ハリーポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』、『ネバーエンディング・ストーリー』、『ナルニア国物語』、日本では『千と千尋の神隠し』が、こうした異郷・異界とこの世との間を往き来する物語である。

日本の古典である『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』などにおいて、この理想的な異郷は「常世」と呼ばれている。飛鳥・奈良の万葉人の心をとらえ魅了したのは、仏教ではなく、陰陽五行説であり、中国の道教や仙人思想、不老長寿、幻術の信仰であった³⁾、と折口信夫は指摘している。「常世」とは、老いることのない永遠の世界、幸福な人たちが住むという桃源郷である。「はたの広物・鱈の狹物・沖の藻葉・辺の藻葉、尽くしても尽きぬわたつみの国は、常世というにふさわしい富みの国土である。』⁴⁾常世は、豊かな食べ物と悦楽に満ちた富の国、不老不死の楽土である。飛鳥・奈良時代の逸話に伝わる、丹後に住む漁師、浦島太郎が訪れたという海中の竜宮城は、海の彼方の「常世」であった。但馬の国、いずし たじまもり出石の田道間守が垂仁天皇の命により不老不死の靈菓・靈菓、「ときじくのかぐこみ」(橘；みかん)を求めて渡ったという国も、海の彼方にある「常世」であった。

そうした海の彼方にある理想郷としての「常世」の国は、丹波丹後の人々の考えでは、このあたりの渚から、真向うに当たるとしていたのであろう。もつとずっと西へ赴いて、出石人の国々を越えた向こう

の出雲びとたちは、またやはり海彼岸^{カイヒガン}に同様な楽土を想っていた。海岸の窟から、そこへ通い路があって、その島から小さな神が異風な船に乗って来たなどと伝えを残している。⁵⁾しかし、飛鳥・奈良時代に、富と長寿の国、幸福の国と信じられていた「常世の国」は、やがていつしかその名も消え失せてしまったと、折口はいう。

しかし、そんななかで、唯一「ニライカナイ」と呼ばれる異郷信仰が現代の沖縄に残っている。「にらいかないと言うのは、海の彼方の理想の国土で、神の国と考えられている処である。儀来河内・じらいかないなど、色々に発音する。神はここから、時に海を渡って、人間の村に来るものと信じられている。人にして、死んでにらいかないに行くと、神となったものの例として……。」⁶⁾

ここで折口は、論文「古代生活の研究」のなかで、沖縄の「ニライカナイ」を海の彼方の常世として説明している。「ニライカナイ」は神の国であり、神は時を決めて定期的に人間の住むこの世にやって来る。そして人間は、死んだら、「ニライカナイ」に行くと神になる、と現代でも沖縄では信じられているというのである。

さらに折口は、「にらいかないは元、村の人々の死後に霊の生きている海のあたりの島である。……そうした島から年の中に時を定めて、村や家の祝福と教訓のために渡って来るものと考えられることになる。しかも、この記憶が、そうなって久しい後まで断片風の残っていて、楽土の元の姿を見せているのである」⁷⁾と語っている。

「ニライカナイ」は神の国であるが、ここではさらに「ニライカナイ」は死後の「あの世」であると、折口は説明している。それは、人間が死んだ後に魂となって生きる「あの世」であり、海の彼方にある未知の島である。その島から、死者の霊(祖霊)が、時を決めて定期的に、人間の住むこの世へ、子孫の祝福と教訓のためにやって来るのだというのである。

ここに記された折口信夫の「ニライカナイ」論には、神と人の靈魂のあり方が簡明にまとめられてい

る。人間が死ぬと、その魂は肉体から離れて、海の彼方にある「魂のふるさと」「常世」へ逝く。常世は「あの世」であり、他界であり、異郷であり、先祖の霊や神々が住む国である。常世に行った死者の霊は、毎年決まった時に定期的に、神（祖霊）となってこの世を訪れ、子孫に祝福と教訓を与えて、ふたたび「魂のふるさと」「常世」へ帰って行く。

折口信夫の「ニライカナイ」論すなわち「常世」論をめぐって、私たちは3つの点を確認することができる。(1)日本人の他界観は垂直他界ではなく、水平他界しかも海彼他界であること。仏教やユダヤ＝キリスト教、あるいは古代ギリシア神話などのあの世観はいずれも垂直他界であるのに対して、日本が水平他界であるのは注目に値する。ただし、時代が下り、日本人の集落が海岸から内陸部へと広がるにつれて、海彼他界から山上他界（または天上他界）に変化していったことを、折口は注記している⁸⁾。(2)常世は霊性の世界であり、すべての霊的なものは常世からやって来てこの世の身体に宿り、すべての身体、すべての自然物に生氣をもたらし。そして、人間は死ぬと霊として他界へ行き、あの世の神（祖霊）となる。そして(3)神（祖霊ないしは死霊）は、年ごとに時期を定めて、この世に来訪し、子孫に福と力を与える。

4. 仏教における浄土と常世信仰

日本人は、西の海の彼方に対して特別な思い入れと郷愁的な信仰をもっていた。それは文化的な伝統にも表われている。日本の全国にわたって「夕陽百選」といわれる夕日の美しい景観を愛でる日本人の美意識もそうだが、とくに日本に伝来した仏教の取り入れ方に、日本における精神文化の特徴があるように思う。

飛鳥時代に伝来してきた仏教が、平安から鎌倉の時代にかけて、ようやく日本の一般庶民のあいだに受け入れられたのは、人の臨終時に西の彼方から来迎するという阿弥陀仏信仰を通してであった。しか

し、そもそも仏の座す国は十方にあり、たとえば東は薬師仏の浄瑠璃浄土、北は弥勒仏の兜率浄土、南は観音仏の補陀落浄土といった仏国土があるとされるが、日本では西方の彼方にある阿弥陀仏の極楽浄土ばかりが民衆のあいだに信仰された。西に通じるのは死者が向かう救いの門である。そこには、西の海の彼方にあこがれる常世信仰が重ね合わされていたのではないだろうか。折口信夫は、論文「山越しの阿弥陀像の画因」のなかで、平安時代から大阪・四天王寺詣に常世信仰があったことを指摘している。「四天王寺西門は、昔から謂われている、極楽東門に向かっているところで、彼岸の夕、西の方海遠く入る日を拜む人の群衆したこと、およそ七百年ほどの歴史を経て、今もお若干の人は、淡路の島はおろか、海の波すら見えぬ、^{すす}煤ふる西の宮に向かつて、くるめき入る日を見送りに出る。」⁹⁾聖徳太子が創建したとされる四天王寺は、平安時代から、その西門が海に沈む夕日を拜む名所であった。なかには、阿弥陀仏の極楽浄土をめざして、夕日の沈む西の海へ向かって入水往生した信仰篤い僧侶もいた。「四天王寺には、古くは、日想観往生といわれる風習があつて、多くの篤信者の魂が、西方の波にあくがれて海深く沈んで行ったのであつた。」¹⁰⁾それは平安時代から鎌倉時代にかけて拡がった「日想観往生」といわれる夕日の沈む西方浄土への入水自殺である。

その後、中世に流行した「^{みだらくとかい}補陀楽渡海」もまた常世信仰にもとづく海彼往生である、と折口は指摘している。「熊野では、これ（日想観往生）と同じことを、補陀楽渡海と言つた。観音の浄土に往生する意味であつて、^{びょうびょう}森々たる海波を漕ぎきつて到り着く、と信じていたのがあわれである。」¹¹⁾それは、「海彼他界」信仰がなければ、とても理解しえない蛮行である。西洋人はこれを「悪魔へ生け贄を捧げる儀式」¹²⁾といっている。

井上靖の短編『補陀楽渡海記』¹³⁾にも語られている「補陀楽渡海」とは、南方の観音菩薩がいるとされる「補陀楽山」をめざして、大海へ舟出する補陀落浄土信仰の実践である。『紀伊続風土記』によれば、

弘安年間（鎌倉時代1278年～1287年）、熊野那智の海岸に海の彼方から小さな観音像が漂着した。それを勝算という僧が拾いあげ、浜に補陀楽山寺を建立したという¹⁴⁾。渡海を実践する僧は、群衆に見送られて、那智の海岸から小さな船に乗り、舟上で息絶えて、その屍が舟とともにるか南方の補陀楽山に向かって漂流する。そこは観音仏の浄土であり、屍はふたたび生命を得て蘇り、浄土の住人となる。この「補陀楽渡海」は、15世紀半ばの室町時代から17世紀江戸時代にかけて、盛んに行われている。初めは生きたまま舟に乗って渡海するが、その後、江戸時代に入ると、死後の遺体を舟に乗せて渡海させる、いわば水葬儀礼に変わっていった。

西方の極楽浄土といい、南方の補陀楽浄土といい、いずれも仏教によって語り広められた仏国土であるが、その信仰実践の根底には日本古来から受け継がれる「常世」という海彼他界信仰が根を張っていることがわかる。同じように、今日においても、日本の海辺の各地に（ここ山陰地方にも）^{しよりょう}「精霊流し」の風習が残っている。お盆に家へ帰ってきた故人の霊を、お供えとともに、精霊舟に乗せて川や海に流して、あの世へ送り返す行事である。それは、明らかに、「海彼他界」信仰の名残であろう。

仏教の視点から言えば、伝来した仏教が日本固有の祖霊観、他界観に合わせて、これに習合したからこそ、仏教が日本の一般庶民に浸透していった。それを「仏教の墮落」と言うこともできようが（しばしば「葬式仏教」と揶揄される）、むしろ私は仏教が、日本に浸透する間に、インドや中国とは異なる日本独自の靈魂観に影響されて、きわめて特異な日本仏教へと変貌したのだと考えたい。

5. 常世からの来訪～「まれびと」

私たち日本人の祖先は、夕日が沈む、るか西の海の彼方からこの日本列島へやって来た。その先祖の祖国「妣が国」は、やがて日本人の「魂のふるさと」になった。すべての霊的なものは、そこから来

てふたたびそこへ帰って行く。それと同じように、私たちの魂もまた、るか西の海の彼方からやって来て、私たちの肉体が死ぬとふたたび魂はるか西の海の彼方へと帰って行く。それは「常世」であり、「他界」であり、死者の国である。死者の霊、つまり死霊は、祖霊として、神として、毎年毎年時期を定めてこの世に生きている子孫のもとを訪れる。

このような祖霊神を折口信夫は「まれびと」と呼んでいる。現代でも、めったに来訪しない貴い賓客のことを「まろうど」というが、その「最初の意義は、神であつたらしい」と折口は述べている。「まれびと」とは「時を定めて来り臨む神である。大空から、海のあなたから、ある村に限って、富と齡とその他若干の幸福とを齎して来るものと、村人たちの信じていた神のことなのである。」¹⁵⁾

『古事記』には、オオクニヌシ（大国主）の命が国を作り治めたときの協力者スクナヒコナ（少彦名）の命は常世人であり、オオクニヌシとの国作りを終えた後に、ふたたび常世へ帰って行ったと記されている。スクナヒコナは日本（出雲）に豊穰をもたらした「まれびと」であった。日本の伝統的な芸能である能や神楽に登場する白髭の聖なる老人「翁」も「まれびと」である。あるいは、今日の日本でもよく知られる、秋田のナマハゲもまた「まれびと」であると¹⁶⁾、折口は述べている。顔を仮面で覆い、蓑と蓑傘を身につけた「鬼」の装束をした異人である。北陸から東北の海沿いにかけて行われている奇習で、とくに秋田では、その異人を「なまはぎ」と言っている。「それらは災いを払うためではなく、もともと幸福のためにやって来たのである。そういう者（異人）に、穢れを持って行ってもらうのである……。」¹⁷⁾

日本では今日にいたってもなお衰えぬ行事の一つに、「お盆」がある。「こうした神々の来ぬ村では、家の神なる祖先の霊が、^{うらぼん}盂蘭盆のまっ白な月光の下を、眷属大勢ひき連れて来て、家々にあがりこむ。」¹⁸⁾ 仏教經典の「盂蘭盆経」の中に、仏陀が7月15日に先祖や死者への供養を勧めている物語があ

る。その時に供物として食べ物を盛る容器（今でいう「お盆」）を「盂蘭盆」といい、これに因んで先祖供養の行事を「盂蘭盆会」（略して「盆」）と言うようになった。「盆」という名の由来は仏教であるが、それ自体は仏教伝来以前からあった日本土着の魂祭りであると言われている。お盆に子孫の家に帰って来る祖霊や死霊は、まさしく「まれびと」である。旧暦の7月15日を中心として、13日に祖霊や亡くなった自分の親族を「迎え火」を焚いて家に迎える。この時、都会へ出ていたすべての家族が実家に集まって、お墓へお参りをし、家では祖霊や死霊とともに酒を飲み食事をする。それは霊を供養し歓待する行事である。16日には、近くの川辺で「送り火」を焚いて、霊を見送る。毎年、日本全国で繰り返される死者と生者の鎮やかな魂の交感である。

6. 「まれびと」の歓待～「祭り」

日本の宗教とは、このような「まれびと」を迎え入れ歓待する行事にほかならない。その意味で、日本の宗教は年中行事そのものに重心があるということが出来る。そして「まれびと」をお迎えする宗教的行事とは何かと言えば、それこそが日本人の大好きな「お祭り」なのである。折口は論文「日本の年中行事」のなかで次のように語っている。「何のために祭りが行われたかという、神この世に出現せられ、村里あるいはある家を訪わせられる。するとその神を迎えて歓待申さねばならぬのです。つまりこうした歓待申す儀式が祭りであったわけです。」¹⁹⁾日本において、「祭り」は宗教的行為の補足として行われるのではなく、宗教的行為の核心をしめるもの、もっとはっきり言えば神関係そのものを表す宗教的行為なのである。

「まれびと」の来訪は、初めのうちは年の変わり目、つまり年神としてやって来たのが、やがて季節の節目とともに多くなって来たという。「日本人は、常世人は海の彼方の他界から来る、と考えていました。はじめは、初春に来るものと信じられていたのが、

後はたびたび来るものと考えようになりました。……その祭りのたびごとに、常世人が来臨して、禊ぎや鎮魂を行って行く。」²⁰⁾

「祭り」が「まれびと」の来訪を迎える宗教的行為だとすると、それはどのような歓待によって迎える行為なのであろうか。「祭り」の中心をなすもの、「祭り」を祭りたらしめるものとは、いったい何であらうか？ 折口の「祭り」論は、その問いに対して端的に答えている。

「祭り」あるいは「祀り」（神を祀る）とは、もともと「献ずる」という意味である。それは、「人間の物を神の物として供える」²¹⁾ということである。折口は神への献上に3種類あるという。²²⁾1つは、人間が口にするもの（食物）を神に献上する。2つ目は、神が身につけるもの（著物、衣類、装身具）を神に献上する。そして3つ目は、神の財産となるもの（刀剣、宝物）を神に献上する。この中でも「祭り」の最上級の献上は、神に「食べものを奉る」ことなのだという。日本人の神関係は祈りでもなく、断食でもなく、瞑想でもない。私たちが普段から行っていること。たとえば、わが家の仏壇にバナナを1本お供えしたり、家族がいっしょに食べるそのご馳走をお供えしたりする。そして、神棚や仏壇に手をあわせて、今日一日の出来事を報告し感謝する。その日常の何気ない心遣いが、日本人にとっての神関係となる。「まつる」とは神が欲するものを奉ることだと、折口は言う。「日本の国の昔の信仰では、神が、穀物の中の米というものを非常に望んでおいでになるのであって、この神のために、米を作ってこれを神にさしあげるのである。」²³⁾だから「まつりごととは、食物を献上することに関する行動儀式」²⁴⁾であった。

そして、折口はさらに踏み込んで、「祭り」とは「神と人間の饗宴」²⁵⁾だったであろうと説いている。「現実に見える霊的なものの前に食物を運んで、その霊的なものが、自ら食いつ飲んで歌い、舞い、饗応者もまた飲食して歌舞するところの饗宴をば、祭りと言わなかったかどうか。おそらく日本の古い

祭りは、そういう形の祭りが力強く行われていた』²⁶⁾と折口は言う。

それは現代でも、神社で行う神事の後に行われる「直会（なおらい）」というものである。神の食べ物（神饌）を祭場へ運び、神へお供えする。神事の一連の行事が行われたら、その後に神へ捧げた神饌を下ろして、神事に参加した人たち一同でお神酒をいただき神饌を食するのである。現代では、最初に行う神事が主であって、直会は神事終了後の打ち上げパーティーのようなものとなっているが、昔は後者の打ち上げの宴会こそが「祭り」だったのだと、折口は言う。「祭り」は神と人間の「共食」なのである。「饗宴のための材料を運ぶところの、饗宴の場所とは席を別にした穩ノ座（おんのざ）の光景だけを切り放して、それを祭りだと信じて来たのである。実は祭りの重要な部分は、さらに席を改めて行うところの宴ノ座（えんのざ）においてするのである、ということを考えねばならない。』²⁷⁾

昔、おそらく奈良時代以前から、山の神は桜の開花とともに人の住む里に降りてきた。それは、その年の米作りの始まりでもある。「神は田植えに來臨して、刈り上げが終わると、帰られる』²⁸⁾と折口はいう。人びとは、山桜の木の下に祭壇を設けて、神にお神酒とご馳走をお供えする²⁹⁾。このときの座が「穩ノ座」である。一連の神事が終わると、神へお供えしたお神酒とご馳走を下ろして、人びとは、桜の木の下で、その酒とご馳走をみんなで共に飲み食べる。神が食したものを人びとが食す。神と人が共食し、人と人が共食する。「神人共食」、「あいなめる」（相嘗める）のである。「宴ノ座」である。それは稲の実りを祈る行事だった。この農耕儀礼を始めとして田植えが始まり、その年の米作りが始まる。そして、桜の花は、その年の豊凶を占う花として、農民の関心を引いた。日本人が桜の花が散るのを惜しむのは、その時からの感性である。折口は、論文「花の話」のなかで、桜の花について述べている。「昔の桜は、山の桜のみであった。遠くから桜の花を眺めて、その花で稲の実りを占った。花が早く散った

ら大変である。……奈良朝の歌は、桜の花を賞めていない。観賞用ではなく、むしろ、実用的なもの、占いのために植えたのであった。』³⁰⁾

桜の花が観賞用として愛されるようになったのは、平安時代になってからのことであった³¹⁾。農耕儀礼であった桜の木の下での「直会」が、その「宴ノ座」の部分だけを切り離して、平安貴族の花遊びとなって姿を変えた。それが、今日にまで至る「花見」の始まりである。「花見」とはただ単に桜の美しさを鑑賞するのではない。桜の花の下で、人は神と共に酒を飲み、ご馳走を食べる。そこには、「祭り」の原初の姿の名残があるのである。

7. 靈魂信仰～常世からの漂着(1)若水

私たちの祖靈神は、はるか海の彼方からこの世にやって来て、生きている私たちに幸福と教訓を残して、また海の彼方へと帰って行く。しかし、魂のふるさとから海を越えてやって来るものは、それだけではなかった。靈水ともいべき呪術的な水もまた、常世からの來訪物と信じられていた。「常世」という魂のふるさとに所属する、エネルギーとしての靈魂「たま」が水に付着して、あるいは物に付着して日本列島へやって来る。

昔は水道がなく、どの家庭も井戸から水を汲んでいた。新年の早朝に、その年初めて汲んだ一番水のことを「若水」という。若返りの水という意味であり、沖縄では「すで水」という。その「若水」を神棚にお供えし、また雑煮を煮るのに使う。その水は靈力があり、1年の邪気を払ってくれる不思議な水である。折口は、この「若水」（あるいは「すで水」）について、次のように述べている。「初春の日には、常世から通ずるすで水が来る。首里朝時代には、すで水は、国頭の極北辺土の泉まで汲みに行った。それが、村の中のきまった井にも行くようになり、一段変じて家々の水ですますことにもなった。これが日本の若水で、原義は忘れられて、ただ繰り返すばかりになった。……常世の国から通う地下水である。

だから、常世浪は皆いずれの岸にも寄せて、海の村の人の浜下り・川下りの水になる。」³²⁾日本人は、常世からくる若水によって、その年の新たな生命を得、田畑もその水によって新しい力を得る、と信じていた。

現代でも、毎年春の訪れを告げる3月12日に、奈良の東大寺二月堂で「お水取り」の行事が行われる。重さ40kgもある大松明に火を放ち火の粉をふり払う行事として、おなじみのものである。人びとはその火の粉を浴びて、新しい年の無病息災を祈る。しかし、この行事の本当の趣旨は、その後の夜中に非公開で行われる「若水」取りである。若狭湾に通ずると言い伝えられる堂内の「閻伽井屋(あかいや)」の井戸から春一番の若水を汲みあげ、これを本尊の十一面観音にお供えするのである³³⁾。「閻伽(あか)」とは仏にお供えする功德水を意味する仏教用語である。寺で行う行事として、仏教の体裁をとっているが、行事の本当の内実はきわめて日本的な呪術信仰にもつづいているのである。

8. 霊魂信仰～常世からの漂着(2)石

海の彼方からの漂着物は「若水」だけではない³⁴⁾。日本人の霊魂観を考えるうえで最も重要な漂着物として忘れてはならないものが、「石」である。折口は「剣と玉と」のなかで次のように述べている。

「抽象的なたましいが、ものの形を現して来る場合がある。このたましいは我々の知っている限りの遠い彼方の常世国から来る威霊である。日本には古くから漂著神の話があるが、これはたましいの信仰と関係を有しているのである。……古代の人々は、なにか沖の方から海岸に寄って来るものがある。その漂著したのを見ると石であった。すなわち、一夜の中に常世の波に打ち寄せられて、忽然として一つの石が沖の方に現れたと見る間に、見る見るうちに大きくなったなどと言う。これはたましいが石の中に入ってやって来たのであって、たましいが寄って来たのであると考えた。」³⁵⁾

魂のふるさと、「常世」から魂が石に宿ってやっ

て来る、と古代の日本人は考えていた。海辺に打ち上げられた小石はすべてが、常世にちなんだ霊力を持っている。石には不思議な霊力がある。それは、宗教学的には、迷信であり呪物信仰である。しかし、現代人の私たちでも、珍しい石や美しい宝石を、単に美しいと感じるだけでなく、健康や幸運をもたらしてくれる「お守り」(守護霊)のように珍重する心理がある。それを非科学的な呪物信仰だと言われても、それでこの心理が消えるわけではない。折口はこのような石に内在する不思議な霊力を「たま」という。それは「常世」という「魂のふるさと」に由来する「たま」である。

折口信夫が行う古代研究の重要な研究対象に『万葉集』がある。『万葉集』のなかには、「たま」という言葉が多種多様に詠われている。その際、「たま」は「玉」「石」「珠」の漢字が当てられている。石でも、人の骨でも、真珠の貝でも、万葉人はそれを「玉」と呼んだ³⁶⁾。『万葉集』に詠われた「たま」の歌をここに紹介しよう。

「妹がため われ玉拾う 沖べなる 玉寄せ持ちこ 沖つ白波」(9巻1665)

折口は次のように訳している。「家にいる愛しい人のために、自分は玉を拾っている。沖の波よ、沖のほうにある玉を岸へ持って寄せて来い。」³⁷⁾

この「玉」は石を表している。古代の人は、海辺で美しい石を見つけると、それを家へもって帰って妻に、あるいはわが子に持たせた。それは病気や災難から身を守ってくれる護身石である。そんな情景で歌われた歌であろう。作者の愛しい妻は少し病弱だったのかもしれない。そんな妻のために海辺に来て、石を探している。沖の白波よ、どうか、妻のために生命力の強い美しい石を運んで来てほしい。そんな妻への愛を詠った歌である。

『万葉集』には、「たままぎ」といって魂を探す歌がある。

「信濃なる 千曲の川の さざれ石も 君し踏みてば 玉と拾はむ」(14巻3400)

折口は次のように訳している。「信濃なる千曲の

川のさざれ石も、あなたが踏んでお行きなされたなら、玉と置いて拾いましょう。』³⁸⁾

おそらく作者の夫が、信濃の地に赴任して、そこで亡くなったのであろう。きっと夫は千曲川のこのあたりを散歩したにちがいない、と妻は思った。だから、夫が踏んだであろうこの石を夫の魂として持って帰りましょう。夫の分身として、あるいは遺骨の代わりとして、河原の石を大切に持ち帰る妻の切ない歌である。日本人は、今日においても、故人の遺骨に魂がこもっているという「骨」信仰を持っている。それは魂の依代である。肉体から遊離した魂がまた戻ってくる時に依り憑く物という意味で、依代である。日本人は、骨や墓、位牌などをその故人の依代として考えている。しかし、故人の骨が失われている時、骨の代わりに石を依代とする。石は魂の分身であり、魂の分霊なのである。

私事で恐縮だが、私が幼かった頃、母の実家で、不思議な水がめを見たことがある。その水がめのなかに身を乗り出して覗いたところ、水がめのなかには水がはってあって、その底には子どもの握り拳くらいの大きさの石が沈んでいた。その石はなにかと家の人に尋ねたが、幼かった私にはそのときの説明を理解することができなかった。私が大学へ通うようになってから、それが民俗学でいう「産石」^{うぶいし}であることを知った³⁹⁾。

昔は、日本の各地で行われた風習である。赤子が生まれると、産飯^{うぶめし}あるいは産立飯^{うぶたてめし}といわれるご飯を炊いて、お膳にのせる。そのお膳に、近くの河原や神社の境内から拾ってきた小石をのせるのだそうである。この小石を「産石」という。それは、万葉人が海辺に拾いにいった石と同じ、「たま」の象徴であり、赤子の魂の分身となる。赤子の魂が身体から抜け出さないようにするためのお呪いである。その後、子どもが動き出すようになると、その小石は水がめの底に沈めておく。子どもの魂が身体に定着して健やかに育つようにという、鎮魂（たましずめ）の呪術である。

9. 靈魂信仰～依代

ユダヤ教やキリスト教、イスラム教といった一神教は偶像崇拜を厳しく禁止している。日本の家庭には仏壇があり、そこには仏像が祀ってある。路傍には地藏が立っており、通りすがりの日本人は思わず地藏に手を合わせる。そこを通りかかった西洋人が、私の耳元に「偶像！」と見下すように呟いたのを、私は今でも覚えている。私たち日本人が仏壇の前で拜む姿は、欧米人が見れば、「偶像崇拜」なのである。いかに歴史的な石仏像であろうと、それは神を形どった偶像である。しかし、木や石で作られた仏像や神像は、仏そのもの、神そのものではないが、そこには仏の靈魂、神の靈魂が依り憑いて宿っているのだと、日本人は考えている。

このように神そのものではないが、神の靈が降りて依り憑くものを、折口信夫は「依代」^{よりしろ}と名づけた。「依代」は、「まれびと」とともに、折口信夫が新しく作った民俗学的用語である。神が降りると信じられる特定の森や樹木や岩（磐座^{いわくら}）は神の依代である。神社の御神体とされる鏡は神の依代である。寺や家庭の仏壇で祀られている仏像は仏の依代である。ただし、「依代」という言い方は、神の側から見た言い方であり、人間の側から見た場合の正確な言い方は「招代」（おぎしろ）だ、と折口は注意している。

「元来、空漠散漫たる一面を有する神靈を、一所に集注せしめるのであるから、適当な招代^{おぎしろ}が無くては、神々の憑りたまわぬはもとよりである。この理は、極々の下座の神でも同じことで、……人間の精靈でも瓜・茄子の背に乗って、はじめて一時の落ち着き場所を見出すと言うなども、同じ（依代の）思想にほかならぬ。神殿の鏡や仏壇の御像、さては位牌・写真の末々に到るまで、なるほど人間の方都合で設けた物には相違ないが、これが深い趣旨は、右の依代^{ヨリシロ}の思想にあるのである。』⁴⁰⁾

神は実体がなく靈的な気のようなものであるか

ら、一所に集中させるために、「招代」(「依代」)がなくてはならない、と折口はいう。神の霊だけではない、死者の霊も人の生霊も自然界の霊も、特定の自然物やそれに似た類似物に依り憑くのだ、と日本人は昔から考えている。盆に帰って来る先祖の霊は瓜や茄子の牛馬に依り憑いてやって来る。仏壇に飾られた故人の位牌や写真は死者の霊の依代である。墓や墓石は死者の依代である。遺骨も死者の依代である。死者は墓や墓石に、あるいは遺骨に定着しているわけではない。私たちが墓に詣でた時、死者の霊が墓に一時的にやって来てその墓石に依り憑き、私たちに^{あいたい}相対するのである。それが「依代」の意味である。

だれかが決めたわけではないのだが、目に見えぬ霊魂はある特定の自然物、あるいはそれに似た類似物に依り憑くのだと、日本人は今でも無意識のうちに感じとっている。神社が神の依代であるように、家の神棚も神の依代である。神や死者の霊が人に依り憑くように、人形にも霊は依り憑く。流し雛で、女の子の悪縁を雛人形(形代)に移して川に流す、その人形は女の子の依代である。あるいは、神が降りる特定の樹木・岩・建物や特定の場所には「^{しめなわ}注連縄」をはるが、その「注連縄」はそこにあるものが依代であることを示す標識にほかならない。

さらに、折口は「人間の場合でも、髪・爪・衣服等、何かその肉体と関係ある物」⁴¹⁾もまた「依代」であると指摘している。たとえば、私たち日本人は、亡くなった故人の髪や衣服を故人の形見として大切に保管する。あるいは、高校卒業時に、女子生徒が好きな男子生徒の上着のボタンを奪うというのも、それが依代だからである。そこには無意識のうちに日本人特有の霊魂信仰があるのである。

折口の「肉体と関係ある物」という定義から少し外れるが、日常使用する物(道具)が霊魂化するという日本人の霊魂観も、やはり「依代」信仰によるものである。私たちが日々使っている櫛や茶碗や箸は、ほかの人が(たとえきれいに洗っても)使うことを躊躇う。他人が使ったものを嫌うし、他人に使

われるのも嫌う。だから日本人は、外食の時には、割り箸を使う。コップや皿やお椀は洗えば他の人が使うのに、茶碗や箸はその人だけが使う「属人具」である。それは、日本人特有の霊魂信仰によるものである、と言う以外に説明できない。日本人は、日々使う道具や物にも霊魂が宿ると考えていて、室町時代には道具に依り憑く霊魂を「^{つくもがみ}付喪神」と名づけた。現代においても、日本人は、針や包丁、人形、ぬいぐるみなど、日常的に触っている物を捨てる時には、そこに宿った霊に崇られぬよう、寺社に供養してもらおうという感覚をもっている。これも私たち日本人の霊魂観によるものである。

折口はまた、名前にも依代の働きがある、という。「素朴単純な信仰状態では、神の名を呼んだだけで、その属性のある部分を人間が左右し得たので、神は即惹かれ依るものと信ぜられたのである。」⁴²⁾日本の平安時代から鎌倉時代にかけて、浄土系仏教の「阿弥陀仏」信仰が発生し流行した。「南無阿弥陀仏」と称名するだけで、阿弥陀仏がわれわれのもとに來臨する、という信仰である。それは日本独自の宗教観である。

仏の名前が仏の霊の依代であるとするれば、神仏だけでなく、人間の場合でも同じことが考えられる。折口は、論文「最古日本の女性生活の根柢」において、昔「人の名は秘密であった」⁴³⁾という。名前そのものにその人の魂が宿っているからである。とくに江戸時代以前の女性は、結婚するまで、男にその名を明かすことをしなかった。男は女に名前をたずねる。「君の名は？」と。それは男が女にプロポーズする意思表示である。女は、その男にだけ聞こえるように、そっと自分の名を告げる。それはプロポーズをお受けしますという受諾なのだ。昔の人は、そうした男女のやり取りを「^よ呼ばい」「^な名告り」と言ったのである。昔、女の名前はタブーだったのである。

そしてさらに同じ「^{ひげこ}髯籠の話」のなかで、折口は、「私どもは供物の本義は依代にあると信じている」⁴⁴⁾と語り、神仏にお供えする「供物」もまた依代である、という。

私たちは、今でもお盆の前日に、「盆花」を買って祖霊の墓や仏壇に「お供え」する。もともとは、山のふもとに咲く花を採って、その花に先祖の霊を付着させて、家にあるいは墓に誘うのである。盆花は祖霊が依り憑く依代にほかならない。神棚に「お供え」する榊葉も、もちろん神の依代である。そして灯笼や迎え火・送り火も、これらは靈魂を誘うための依代なのである⁴⁵⁾。

正月にお供えする「鏡餅」も、年神（祖霊）がそこに依り憑く依代である。「鏡餅は魂の象徴である⁴⁶⁾と折口は言う。鏡餅は魂つまり年神の象徴であるという。すなわち、鏡餅は年神へ捧げる単なる供物ではなく、年神そのものがそこに依り憑く座^{くら}だということ、鏡餅が年神の形ある姿であり象徴だということである。

折口は言及していないが、「鏡餅」の「かがみ」とは何かという問題提起がなされている。一般的には、三種の神器の1つである神鏡を模しているためという意味づけが説かれているが、それとは別に、鏡餅の「かがみ」は「かかのみ」、すなわち「蛇（かか）の身（み）」ではないかという吉野裕子説⁴⁷⁾がある。丸餅を二重ないし三重にかさねた鏡餅の上にミカンが乗った姿は、たしかに蛇がトグロをまいて鎌首をあげた姿に酷似している。（なお、吉野女史は、「鏡」は凸型に膨らんだ「蛇（かか）の目（め）」ではないか、と言っている。）私たちは、この神の霊が宿った鏡餅を雑煮へ入れて食すのである。それは、まさしく神霊の摂取にほかならない。

いや、鏡餅だけではない。正月に飾る「餅花」^{もちばな}「繭玉」^{まゆだま}もまた、神を誘い降ろす依代なのだと、折口は語る⁴⁸⁾。「餅花」とは、赤・白・黄・緑など色



とりどりの餅を小さな玉状に丸めて、柳やミズキの枯れ枝につけて飾る、晴れやかな正月の飾りである。養蚕が盛んだった地域では、これを「繭玉」というのだそうだ。

「依代」は、まさに、日本の多神教の風土が作り出した靈魂観であろう。仏教のように具体的な神仏像を作らないが、それ自体形のない靈魂が多様なものを容器にして依り憑く。日本人にとって、靈魂はまさに変幻自在で、結合分離も自在で、際限のない「八百万の神」なのである。

10. 靈魂信仰～丸い玉

「祭り」は神への歓待である。祭りにおいて、人は最上級の歓待として神に食べ物を捧げる。それこそ、日本人の神関係である。

家庭のなかで行う祭りの一つとして、「正月」がある。正月には、餅をついてこれを神に奉げる。餅は、お祝いの日や祭りの日に、神へ奉げる食べ物（神饌）のなかでも最も上等な食べ物である。そして、餅は神が食べるご馳走というだけではない。餅は依り代であり、神は餅に依り憑き、餅に宿る。その餅そのものが神霊となる。神に捧げるその餅は、丸く重ねた鏡餅でなければならない（私の生まれ育った関東では、人が食す餅は角餅だが、神に奉げる餅だけは丸餅である）。新年の年神に奉げたその鏡餅を、私たちは神棚から下ろして、他の供物といっしょに煮たものが「雑煮」である。それは神と人とがいっしょに食べる「共食」の食事形式をとる。普段は「銘々食」の形式で食事をする日本人が、正月や祭りの日、祝いの日には、かならず「共食」の形をとっている。そして、そこには、かならず丸い形にした食べ物や飾り物が配置されている。正月の鏡餅、お盆の団子、お彼岸のおはぎ・ぼたもち、秋の収穫を祝う「十五夜」の団子……。 「丸い」食べ物が、そこにはかならず供えられている。それはなぜなのであろうか？

折口は、「剣と玉と」のなかで、靈魂がとる形について次のように述べている。

「靈魂のたまが形をとると種々な形態となって現れるのであるが、その中で最も優れた形態をとって現れて来たものが、すなわち玉であると考えられたのである。抽象的なたま（靈魂）のしむぼるが、具体的なたま（玉）に他ならなかったのである。」⁴⁹⁾

靈魂のシンボルは「玉」であるという。靈魂が具体的な形をとって現われる場合、靈魂は「玉」・「珠」の形になるのだという。ただし、折口は、「玉」といわれるものの形が、古代と現代（近代）では違うことを指摘している。「玉とさえ言えば、今日では一般に丸いものであるという概念を持っているが、……往古の人々は、玉が丸くってころころ転がるものであるなどとは考えていなかった」⁵⁰⁾といい、石や鉱石、骨や珠玉（真珠・宝石）、さらには「マジックの玉」などを、「具体的な玉」としてあげている。古代人が「玉」をどういう形で捉えていたのか、折口の説明はもう一つ明瞭ではない。

靈魂は「玉」または「玉質」の形をしている、と折口はいう。要するに、靈魂は、まん丸である必要はないが、いわば「丸質」の形であると考えたらよいであろう。たとえば、私たちが「人だま」を死者の魂と考え、それを尾のついた「丸い火の玉」として思い描く。正確には丸くないが、丸質の形をとっている。

正月にお供えする鏡餅、農繁期などで餅が用意できないお盆やお彼岸にお供えする団子・おはぎ（秋の粒あん）・ぼた餅（春のこしあん）は、みな丸くして神にお供えする。神霊がそこに宿り、それゆえに靈力と生命力に満ちたものとなる。供物である依代を丸くすることによって、靈魂の依り憑きを豊かにする、という感覚がそこにはある。「容れ物があって、たまがよって来る。」⁵¹⁾丸い玉は、他界からやって来る靈魂を受け入れる容れ物なのである。

正月といえば、子どもが喜ぶ「年玉」がある。今でこそ、年玉は子供たちに与える新年のお小づかいのことをいうが、かつては家長が家族へ贈る正月の贈答品だった。地域によっては、小さい丸餅を新年の「年玉」として子どもたちに分け与えたといわれている。この丸い「年玉」は依代であるから、そこ

に靈力と生命力が依り憑き集まって来る。その生命力を子どもたちが食し身体に取り込むのである。

そして、正月を飾る「餅花」もまた、神の依代として、小さな玉状にした色とりどりの餅を木の枯れ枝につける。それは美しく可愛らしい正月の飾り物である。しかし、それが小さい丸餅で作られていることに意味がある。正月がすんだ後の小正月に、これを子どもたちが「どんど火」で焼いて食べる。鏡餅と同じように、餅花の餅が丸いことによって、神の霊が豊かに依り憑き、その霊を食することで、私たち日本人は新しい年の元氣力と生命力を摂取するのである。

そういえば、うどんやラーメンの麺は、1玉、2玉と数える。今でこそスーパーなどで四角いビニール袋に包まれているが、昔、私が子どもだった頃、うどんやラーメンの麺は1つ1つを丸い形にして売っていたのを思い出す。そうすることで、私たち日本人は、無意識のうちに、食べ物にエネルギーが宿り蓄えられるのだと信じていたのである。



11. まとめ

はるか昔、日本人の祖先は西の海の彼方から日本列島へやって来た。彼らは海の彼方の祖国を「妣が国」として懐かしんだであろう。やがて、その祖国がどこにあったかは忘れられ、西の海の彼方、あるいは山の彼方に夕日が沈むのを見て、不思議な郷愁を体験した。それは、私たち現代の日本人にとっても変わる事のない不思議な郷愁感である。私たちの「魂のふるさと」は、夕日が沈む西の海の彼方に

ある。万葉時代の人びとは、それを「わたつみの国」「常世」と呼んで、特別な郷愁を抱いていた。

私たちの魂は、その夕日が沈む西の海の彼方からやって来て、死ぬとふたたび西の海の彼方へ、「魂のふるさと」へ帰って行く。人間の霊だけでなく、すべての霊、動物・植物・鉱物の霊も、あらゆる自然物の霊が、「魂のふるさと」である「常世」からやって来る。神や死んだ霊、祖先の霊も、毎年毎年、時期を定めて、正月に、あるいはお盆に、あるいはお彼岸に、あるいは収穫の時期に、「この世」の子孫のもとへ来訪し、子孫に幸福と教訓を残して、ふたたび「あの世」へ帰って行く。

神は、「まれびと」として、常世からやって来て、常世へ帰って行く。生まれた赤子に宿る魂も、浜辺にうちあげられた石も、靈魂はすべて、「まれびと」として、海の彼方の常世からやって来て、ふたたび常世へ帰っていく。そう古代の日本人は考えていた。

その常世から来る「まれびと」を、日本人は「祭り」によって歓待した。神にお神酒とお米とご馳走とお供えした。その時の供物は、神が依り憑く「依代」である。とくに餅は「魂の象徴」とされた。神は、お供えの餅に宿り、団子に宿り、おはぎ・ぼた餅に宿る。

その「依代」である餅や団子は、「丸い」ことに意味がある。「依代」を丸い形にすることによって、そこに多くの靈魂（たま）が依り憑き、霊力と生命力に満ちたものとなる。形のない目に見えない靈魂が、丸い形の餅となり団子となるのである。祭りにおいて、私たちはその靈魂であるところの餅や団子を食し、神と一体化し、新たな元気力と生命力を取り入れるのである。

こうしてみると、私たち日本人の神観念がくっきりと見えてくる。私たちが想定する「神」の霊は、一神教の人格神や仏教の救済仏と違って、実体をなさない「気」のようなもの、「縁」のようなもの、「エネルギー」のようなものであることがわかる。だから、日本人にとって、神とは「気配」なのである。山が霧でけむる時がある。山がただならぬ気配を帯

びる時がある。私たちは、そこに何か霊的な存在を感じるのである。私たちが大きな樹の前で手を合わせる時、自然の霊がその樹を通して私たちに相対する。私たちが墓の前で手を合わせる時、故人の霊がその墓を通して私たちに相対する。そして、年中行事とともに、その都度、私たちは神にお供えし、神と共食するのである。

それは、西洋の一神教のように厳しい「信仰」を要求されるものではない。日本人が昔から持っていた宗教とは、「あれか、これか」の決断が求められるようなものではなく、誰もが無意識に行う呼吸のようなものであるように思える。正月には餅を食べ、神社へ詣でる。お盆には墓の前で手を合わせ、故人とともに食事を共にする。それが日本人の宗教なのである。折口信夫が日本人の祖霊信仰や靈魂信仰について語る時、彼はそれを「ほうとする話」という言い方で語り始める。それを読み、それを聞いている私たちも、不思議に「ほう」として和まされている自分に気づくのである。

注

- 折口信夫の引用は『折口信夫全集』（全31巻・別巻1巻、中公文庫、1975年）による。引用箇所は、「論文名」、巻数、頁数で示す。ただし、旧かな使いや漢字の旧字体は、現代の表記に直している。
- 1) レヴィ・ブリュール『未開社会の思惟』、山田吉彦訳、岩波文庫、上巻7頁（日本版序）。
 - 2) 「妣が国へ・常世へ」、全集第2巻、5～6頁。
 - 3) 「妣が国へ・常世へ」、全集第2巻、11頁。
 - 4) 「妣が国へ・常世へ」、全集第2巻、9頁。
 - 5) 「常世浪」、全集第16巻、293頁。
 - 6) 「古代生活の研究」、全集第2巻、26頁。
 - 7) 「古代生活の研究」、全集第2巻、29頁。
 - 8) 「古代生活の研究」、全集第2巻、34頁。「翁の発生」、全集第2巻、381頁。「民族史観における他界観念」、全集第16巻、346頁。「来世観」、全集第20巻、218～220頁。
 - 9) 「山越しの阿弥陀像の画因」、全集第27巻、184頁。

- 10) 「山越しの阿弥陀像の画因」,全集第27巻, 184頁.
- 11) 「山越しの阿弥陀像の画因」,全集第27巻, 184頁.
- 12) 川村湊『補陀楽』, 作品社, 2003年, 14頁.
- 13) 井上靖『補陀楽渡海記』, 講談社文芸文庫, 2000年, 152~184頁.
- 14) 根井浄『観音浄土に船出した人々~熊野と補陀楽渡海』, 吉川弘文館, 2008年, 44~47頁.
- 15) 「古代生活の研究」, 全集第2巻, 33頁.
- 16) 「春来る鬼」, 全集第15巻, 125~129頁.
- 17) 「春立つ鬼」, 全集第15巻, 150頁.
- 18) 「古代生活の研究」, 全集第2巻, 27頁.
- 19) 「日本の年中行事」, 全集第16巻, 392頁.
- 20) 「翁の発生」, 全集第2巻, 374頁.
- 21) 「村々の祭り」, 全集第2巻, 446頁.
- 22) 「祭りの話」, 全集第15巻, 274頁.
- 23) 「祭りの話」, 全集第15巻, 275頁.
- 24) 「祭りの話」, 全集第15巻, 276頁.
- 25) 「祭りの話」, 全集第15巻, 279頁.
- 26) 「祭りの話」, 全集第15巻, 279頁.
- 27) 「祭りの話」, 全集第15巻, 279頁.
- 28) 「年中行事」, 全集第15巻, 67~68頁.
- 29) 和歌森太郎『花と日本人』, 角川文庫, 1982年, 176~178頁. 和歌森太郎によれば, 「さくら」とは「さ」の「くら」, すなわち稲の神霊である「サ」神が依り憑く「クラ」(座)であり, 「桜」は「稲穀の神霊の依る花」であったという. 田植えに因んだ言葉, 「五月」(サツキ)のサ, 「早苗」(サナエ)のサ, 「早乙女」(サオトメ)のサは, すべて稲の神霊「サ」神を指すと考えられる. そして, 宴としての花見は平安貴族が始めた遊びだが, 祭りとしての花見は平安時代以前から農民によって行われた宗教的儀礼であった, と和歌森は述べている. 桜の木の下で酒を飲み交わす「このような花見は, すこぶる農民的な生活に由来する神事であった。」(前掲書, 178頁)
- 30) 「花の話」, 全集第2巻, 472頁.
- 31) 「年中行事」, 全集第15巻, 86頁.
- 32) 「若水の話」, 全集第2巻, 130頁.
- 33) 大系『日本歴史と芸能』第3巻「西方の春~修正会・修二会」, 平凡社, 1992年, 181頁.
- 34) 海辺に打ち寄せられた漂着物のうち, 植物の代表例がヤシの実である. まるで宝物のように, 日本人はヤシの実を珍重した. それは常世からの賜物であった. 折口信夫の師, 柳田国男は, 若い頃に, 愛知県渥美半島の海岸で浜辺に打ち寄せられたヤシの実に遭遇した(柳田国男『海上の道』, 柳田国男全集第1巻, 25~27頁). 柳田国男は, ヤシの実と同じように, 日本人は夕日の沈む西の海の彼方からこの日本列島へ漂着したのではないか, という着想を得た. そのときの感動を友人の島崎藤村に語り, 詞「椰子の実」が誕生した話は有名である. 「名も知らぬ遠き島より/流れ寄る椰子の実一つ/海の日沈むを見れば/たぎり落つ異郷の涙/思いやる八重の汐々/いづれの日にか国に帰らん」.
- 35) 「剣と玉と」, 全集第20巻, 226~227頁.
- 36) 「石に出で入るもの」, 全集第15巻, 216頁.
- 37) 「口訳万葉集(上)」, 全集第4巻, 442~443頁.
- 38) 「口訳万葉集(下)」, 全集第5巻, 184頁.
- 39) 牧田茂『日本人の一生』, 講談社学術文庫, 1990年, 47~49頁.
- 40) 「髻籠の話」, 全集第2巻, 184頁.
- 41) 「髻籠の話」, 全集第2巻, 185頁.
- 42) 「髻籠の話」, 全集第2巻, 185頁.
- 43) 「最古日本の女性生活の根柢」, 全集第2巻, 153頁.
- 44) 「髻籠の話」, 全集第2巻, 198頁.
- 45) 「盆踊りと祭屋台と」, 全集第2巻, 246頁.
- 46) 「盆踊りの話」, 全集第2巻, 261頁. 「鬼の話」, 全集第3巻, 9頁.
- 47) 吉野裕子『蛇~日本の蛇信仰』, 講談社学術文庫, 1999年, 152頁, 124頁.
- 48) 「髻籠の話」, 全集第2巻, 203頁.
- 49) 「剣と玉と」, 全集第20巻, 223頁.
- 50) 「剣と玉と」, 全集第20巻, 221~222頁.
- 51) 「靈魂の話」, 全集第3巻, 275頁.